明治維新150年特集

安楽寺別当大鳥居信全

信全は、文政5（1822）年、京都に生まれました。天保3（1832）年、高辻家の養子として筑前太宰府司務別当延寿王院附弟（法統を受けつぐ弟子の意）に契約し、同6年、太宰府へと下向、その3年後に別当職を継承します。そして、嘉永5（1851）年には、「太宰府司務・天満宮留守・安楽寺別当・延寿王院主・権大僧都」となりました。

信全については、自ら記した『信全一世中略記』が遺っています。これまでの研究によれば、この記録には、まず天満宮安楽寺において行われた「御撫物送迎」「神忌祭」「神幸祭」、また「連歌法会」など、さまざまな宗教行事に関する事項が記されています。また、弘化4（1847）年、京仏師に依頼して、護摩堂に十二天を新造し、安政4（1857）年には、藩の許可を得て、長年の「志願」であった「聖堂学校」の設立を始めるなど、安楽寺天満宮の整備充実にも努めています。一方、嘉永5年には御神忌九百五十年大祭を迎えて、これに専心している様子もうかがうことができます。

しかし、この『信全一世中略記』は、信全が別当職を信厳に譲った翌年の文久2（1862）年10月で終わっています。このあと慶応元（1865）年、文久3年8月18日の政変で、京都を追われた7人の公家のうち5人（五卿）が、長州山口から筑前太宰府へと移ってくることになるのです。

信全の実父は梅小路定肖で、五卿のひとりである三条実美の父実万は信全のいとこにあたります。また、安政5年、京都に上った折には、同じく五卿のひとりで、歌道を家業とする三条西季知に就いて和歌を学んでいます。こうした由縁もあって、信全は五卿の寓居として延寿王院を提供するなど、彼らの太宰府滞在にはことに意を用いました。

慶応3（1867）年、五卿の復官帰洛を目前にして、別れを惜しむように五卿と信全の間で和歌の贈答が行われています。信全の一首に

天ざかるひなにはあれど三年までいましし宿を君な忘れそ

（〔大意〕都から離れた辺境の地とはいえ、3年もおられた仮の住まいを忘れないでください）

があります。これは奈良時代、筑前守であった山上憶良が詠んだ「**天離る鄙に五年住まいつつ都のてぶり忘らえにけり**」（『万葉集』巻5　880番）をふまえたものです。信全は五卿に、立場こそ違え、都から遠く離れて大宰府の地にあった古の宮人の姿を重ね合わせて、先の歌を詠んだのでしょう。

太宰府市公文書館　重松　敏彦

太宰府の文華
～公文書館だより㊽～